

特集 平和のまちミュージアム

~伝えよう戦争の悲惨さ、平和の大切さ、命の尊さ~

戦後75年以上が過ぎ、市民の大多数が戦争を知らない世代となった今、戦争の悲劇は遠い過去のものになろうとしています。私たちは、どんなに時が過ぎようとも、今日の平和と繁栄が過去の戦争における多くの尊い犠牲の上に成り立っていることを忘れてはなりません。

戦争の体験談
戦争を知らない世代に、戦争の悲惨さを語り伝えたい

黒瀬圭子さん
(門司出身・絵本作家)

太平洋戦争が始まった昭和16年(1941年)、私は小学3年生でした。空襲の恐ろしさは今も忘れません。防空壕で震えながら聞いた高射砲の爆音、関門海峡で機雷に当たり、水柱をあげて音もなく沈んでゆく船。港では出征する兵士の見送りだけでなく、亡くなった兵士の遺骨の迎え入れも。しかし、悲しみを表に出すことは決して許されませんでした。私の3人の兄も、長兄は戦地で、次兄は空襲のさなかに、すぐ上の兄は学徒動員先のセメント工場で命を落としました。理不尽な戦争の実態を知ったのは戦後、大人になってから。あの時代を知る人が年々少なくなる中、戦争がどんなに悲惨で恐ろしいことを子どもたちに語り伝えたいと絵本を出版しました。出征する兄を見送った駅で、母が兄の手を取って「元気で帰ってこい」と言った言葉が、今も耳に残っています。



黒瀬圭子さん
(門司出身・絵本作家)

太平洋戦争が始まった昭和16年(1941年)、私は小学3年生でした。空襲の恐ろしさは今も忘れません。防空壕で震えながら聞いた高射砲の爆音、関門海峡で機雷に当



風船爆弾(模型)と戦時下の人々の生活



甚大な被害があった八幡大空襲



焼夷弾(模型)



当時の教科書



竹やりを持った少女の人形



戦時下の暮らし(再現)

市長からのメッセージ

私は、市長就任以来、核兵器のない、戦争のない平和な社会を築いていかなければならないとの思いを強く抱き続けてきました。平成22年には、平和に対する市の基本的な考え方を示す「非核平和都市宣言」を行いました。戦後75年以上が経過し、戦争の記憶が風化していくことが懸念されます。戦争によってもたらされた痛ましい不幸、そして平和の大切さ、命の尊さを次世代へ繋げていくことが私の責務であるとの強い思いから、「平和のまちミュージアム」を開館しました。私たちのいまの平和な暮らしが、多くの尊い犠牲の上に成り立っていることを決して忘れず、平和を求め続けていくことが大切です。戦争を知らない世代、特に、市の未来を担う子どもたちが、このミュージアムを訪れ、平和の大切さや命の尊さを考えることで、新しい未来を切り開いていただくことを心から期待しています。

北九州市長 北橋 健治

特集は2ページに続きます